



磯部真倫さん

地方でも若手医師や学生が高度な医療を学べる環境作りに取り組んでいます。私が専門にする産婦人科は子宮筋腫や卵巣腫瘍、子宮がんなどの手術で腹腔鏡やロボットを使います。おなかを大きく開く開腹手術と比べて、傷が小さく患者さんの負担を減らせる一方で、使いこなすには経験が必要。指導できる医師がいるかどうかで、受けられ

地方の産科医療 支えたい

手厚い実習で組織を強く

る手術の内容に大きな地域差がありました。

手術の技術に自信を持てなかったのは、山形大医学部を卒業して産婦人科医になった頃の私も同じ。その後、大阪で腹腔鏡手術の第一人者の金尾祐之医師の下で学び、考え方を変えたことが一つの転機になりました。

全国から選ばれた6人が参加するセミナー。腹腔鏡手術のシミュレーターで、2カ月後までに決められたタイムを切らなければならず、ひたすら練習しました。上手な手術を見るだけではなく、結果を出すまで努力する。技術者として成長するため姿勢を身に付けました。

新潟大に移ってから、地域全体で腹腔鏡手術を学べるようにしました。当時、新潟県では腹腔鏡手術を指導できる医師がほとんどいなかったため、私が各地の病院を回って若手医師を指導することに。3年間で約4

00回の手術指導を行った結果、腹腔鏡手術の技術を認定する医師が22人育ち、内視鏡手術の件数は倍ぐらいに増えました。患者さんがその土地で手術を受けられて、若い医師もその土地でうまい先生から学べる。そういう循環をつくりたかったんです。

新潟大では学生の臨床実習も改革しました。当時、産婦人科は学生を放置するような実習でした。そこで、1時間ほど腹腔鏡の使い方を練習してタイムトライアルをしたり、シミュレーターを使ったりして、みんなでわいわい学ぶ参加型の実習に変えました。最初は反発もありましたが、最後は新潟大で最も人気のある診療科になりました。学生に産婦人科の魅力ややりがいを伝えることが、地域の産科医療を支えることにつながると考えています。

岐阜大でも同じように、実際に手を動かす実習にして、学生に現場でしか学べない経験をしてみよう。実習の手厚さが評判を呼び、3年間で産婦人科医は

16人から24人に増えました。人を集め、成長させることで組織を強くしていくことを目指しています。

地域医療を支えるには、高度な技術を持つ医師を1人育てるのではなく、多くの医師が成長できる環境が大切だと思っています。自分だけが上を目指すのではなく、周囲の人を引き上げながら組織全体を強くしていく。地域で働く医師がやりがいを持ち、患者さんに質の高い医療を届けられる仕組みを整えていきたいと考えています。

(構成・平子宗太郎)

いそべ・まさのり 岐阜
大大学院医学系研究科産科
婦人科学教授。専門は産婦
人科学・医学教育学。山形
大医学部卒、1977年生
まれ。

